

かわさき生ごみリサイクル交流会だより

NO.5

2016年12月

発行：かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会

第5回かわさき生ごみリサイクル交流会

～生ごみも資源！農・花・人をつなぐコミュニティへ～

2016年10月29日、12の市民団体等で構成する実行委員会と川崎市環境局の主催により、川崎市総合福祉センター（エポックなかはら）においてかわさき生ごみリサイクル交流会を開催しました。第1部は「ひの・まちの生ごみを考える会」代表の佐藤美千代さんにお話しいただき、第2部は、3つの団体と川崎市環境局が事例発表を行いました。参加者78人と、ほぼ会場は満員。市全体の生ごみにかかわる団体と、市民の方々の交流をはかり、ネットワークを広げるという目的を十分に達しました。概要をお伝えします。

第1部 講演『まちの生ごみを農に活かす』 佐藤 美千代さん

（「ひの・まちの生ごみを考える会」「まちの生ごみ活かし隊」代表）

1. コミュニティガーデンとは？

身近な空き地を、住民の手で美しい庭や畑に変え、安全で緑豊かな美しいまちを創造していく協働の庭づくり活動のこと。欧米では社会問題の解決策として、食の確保や福祉などに重点をおく。ニューヨークだけで約800カ所以上ある。日本ではまだ広がっていない。



コミュニティガーデンの効果として、空き地の有効利用、良好な景観・緑地の維持、生ごみの再利用、健康な食の確保・環境教育、防災機能、心と体のいやしと再生、異世代交流・仲間づくり、地域コミュニティの再生、社会問題解決の場があげられる。



交流会会場の様子

2. コミュニティガーデン「せせらぎ農園」とは？

日野市内の1000坪の畑。畑の中に素掘の用水路が流れているのが名前の由来。約200世帯の生ごみを毎週火・木曜日に回収し、「土ごと発酵」（畑に直接生ごみを投入し発酵させる）させ、微生物の力で野菜や花を作る資源循環型農園。会則なし、会費なし、会員なしで、いつでも、だれでも、好きな時間帯に農体験ができる。ケガと弁当は自分持ち。参加者が主体的に創造し、新しいことに挑戦できる農園である。

3. せせらぎ農園の生ごみ循環



約200世帯の家庭で、生ごみの水分吸収と発酵促進効果がある竹パウダーと混ぜ、バケツで保管。週1回、軽トラックで生ごみを戸別回収し、せせらぎ農園の畑に直接投入。発酵促進剤として米ぬかボカシを投入す

る。刈草や落ち葉を載せてから、動物が来ないようにシートをかける。生ごみ投入後 3 日、1 週間、2 週間後に耕うんして酸素を供給。約 40 度の発酵熱で微生物の働きを実感！（あったかくて、大人も子どももビックリ！）



生ごみを直接畑に投入して浅く耕す

約 1～3 ヶ月で生ごみが分解したら、カキ殻石灰で土を中和して、野菜を植え付ける。作業のあとに野菜を分けあい、余ったものは販売する。

4. せせらぎ農園が果たす地域の居場所としての役割

「人間は愛するものと仕事があれば幸せ」

「愛」の反対は？ 答え「無関心」

「仕事」の反対は？ 答え「はた迷惑」

「たすけ愛」で「はた楽」居場所

農作業にはたくさんの仕事があり、自然循環に添っ

た環境にやさしい仕事。大地と触れ合う安心感や、食べものをつくる喜び、植物を育てる楽しみがある。又、世代の違う人とのコミュニケーションが図られ、これまでの経験を活かせる楽しみ、創造する喜びがあり、心身の健康が得られる。農園に集う人達の目的は様々だが、違う目的の人が集まって、つながることが大事。生ごみリサイクルも「義務」ではなく「楽しさ」で広げたい。

5. せせらぎ農園の平成 27 年度活動実績

- 生ごみ・落ち葉・雑草ほか回収量：約 45 トン
- ごみ処理費用削減効果：約 265 万円
- 二酸化炭素削減効果：約 37 トン
- 定例作業参加者と来訪者：延べ 5,000 人以上

6. せせらぎ農園の運営

農作業に参加した人には、労賃としてその日の収穫物をみんなで分けあう。行政との協働はしっかりと図っている。畑担当、ガーデン担当、会計担当、生ごみ回収担当、その他雑務はコアメンバーが担うがみんなが主役。

未来のために生ごみ循環を広げよう！

「せせらぎ農園」訪問記

9 月 13 日、第 5 回生ごみリサイクル交流会に先立ち、実行委員会メンバーが、当日講演される予定の佐藤美千代さんの活動の舞台である「せせらぎ農園」を訪れました。

せせらぎ農園の 1000 坪の畑の真ん中には、幅 80 センチほどの素堀の用水路が流れ、あちこちに野菜が育ち、花が咲き乱れ、住宅も近くて人目にも着きやすい魅力的な場所です。市民が生ごみリサイクルに参加し、農を体験したり、自然と親しんだりできる場所で、佐藤さんは「コミュニティガーデン」と呼んでいます。

無農薬・無化学肥料で野菜を栽培し、農園は近隣の小学校や幼稚園などに開放され学習の場にもなっていて、年間延べ作業参加者は 2680 人、来訪者 2461 人（2015 年）という賑わいです。

当日は激しい雨となりましたが、そんな日でも、欠かさず生ごみを回収し、畑に投入するのは大変な作業ですが、活動に共感される方、ハンディを抱えている方などが定期的に集まり活動を担っています。「生ごみリサイクルだけでは人は集まってきません。壁をなくして入りやすくし、農作業を体験したい人や自然に触れて楽しいと感じる人の居場所になっているのです。」と語る佐藤さんの姿勢に心打たれるものがありました。

都市の中にこんな安らぎの空間があるのは本当にすてきななあ、と参加者一同が胸にあたたかいものを感じて帰ってきました。

（飯田和子「新あさお生きごみ隊通信」12 号より）



第2部 生ごみ堆肥を活用した事例紹介

1. 10年前に生まれた新しい街で人と人とをつなぐエコガーデン（エコガーデンはるひ野 板垣浩祥さん）

麻生区の小田急線多摩線はるひ野駅南口の花壇づくりをしているグループです。現在会員は20名です。はるひ野町内会環境部会の取組として、2012年から毎年5年連続でダンボールコンポストによる生ごみ堆肥化講習会が実施されてきました。その初年度、受講生を中心に、できた堆肥を活用して殺風景な駅前を花で飾ろうと、グループを立ち上げました。



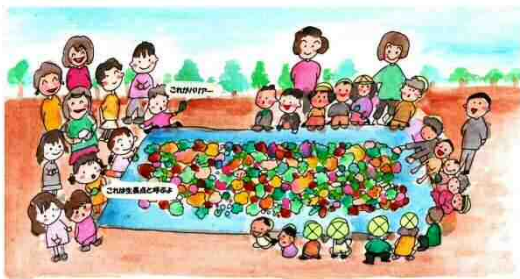
2年後には、第11回わがまち花と緑のコンクールで奨励賞をいただきました。花壇づくりのノウハウを得るため、公園緑地協会の講座を受けたりコンクール入賞者のバラの庭を鑑賞したり、生ごみ堆肥を使った花壇づくりの先輩である吹込クローバーの会（麻生区）を訪問したりして、研究を重ねています。最初12㎡だった花壇は、来年の2017年には4倍54㎡に拡張される予定です。

2. 「れもんぐみとはっばちゃん」

（川崎市立ごうじ保育園 濱中富有子さん 鈴木麻里さん）

2年前にもこの会で当園の活動をご紹介しました。当園では、毎年、年長のれもん組が中心になって、コンポスト（生ごみ堆肥）を使って米作りや野菜作りを1年を通して、体験しています。昨年、この体験を1冊の手作り絵本にまとめました。「れもんぐみとはっばちゃん」です。はっばちゃんは芽を出した双葉の妖精で、当園のマスコットキャラクターです。

体験は2月のコンポストセレモニーから始まります。れもん組の1歳下



の年中のばなな組は、れもん組から新鮮な野菜くずでコンポストができる堆肥化のしくみや作り方を教えてもらって、コンポストデビューを果たし、4月にれもん組になります。そして1年の体験を経て、次の2月に今度はばなな組にコンポストのことを伝授するのです。

子どもたちに伝えたいのは、命の循環です。

3. 生ごみ堆肥で野菜を育てる人をふやしたい

（野菜だいすきファーム 松下長子さん）

宮前区菅生で農家の畑を借りて野菜作りをしています。肥料はダンボールコンポストと手作りの腐葉土です。野菜作りの会員は10名で、賛助会員として、ダンボールコンポストを提供していただく堆肥登録会員は約40名です。堆肥登録会員には旬の野菜などの情報をお届けします。



栽培している野菜は年間30種類くらいで、野菜のある時は、地域で定期的に販売したり、イベントで販売したりします。また、加工もしています。夏にはトマトソース作り、冬にはみそ作り、小麦も栽培して粉を挽き全粒粉パン作りもします。みそ作りは一般参加者への講習会も兼ねています。自分たちで野菜を育て、“まちにいたって農のある暮らし”を楽しみませんか？毎週土曜日または日曜日の午前に作業しています。

4. 川崎市における生ごみの減量化と資源化の取組

（川崎市環境局生活環境部減量推進課 東陽一さん）

2016年度の取組を報告します。

（1）明治大学黒川農場との連携事業

生ごみ堆肥の有用性を検証するため、麻生区在住の市民モニター10名にダンボールコンポストで堆肥化していただき、農場で化成肥料との栽培比較などを行いました。今年で4年目で、これまでに分かったことは



- ・ 生ごみ堆肥には肥料成分が含まれている。
- ・ 生ごみ堆肥はリン酸が少ないため、これを補充すると充分栽培に利用できる。 ということです。

（2）小学校での環境学習を試行

麻生区の金程小学校4年生を対象にダンボールコンポストによる生ごみ堆肥化を実践しました。児童5～6人でダンボール1個を使用。約1か月半、毎日家から持参した生ごみを投入しました。この試行を踏まえて来年度以降の実施について検討します。

（3）生ごみ処理機「キエーロ」の市民モニター募集
土の微生物の力で生ごみを分解する「キエーロ」を12名に使っていただき、意見を取りまとめます。

● 会場との質疑応答（一部を要約します）



ごうじ保育園園長：食育に力を入れ今日は栄養士も来ている。

Q 日野市の委託とはどういうものか？

A 佐藤：生ごみの収集・運搬・堆肥化で委託を受けている。

A 日野市職員：生ごみは「資源」として収集している。農地と佐藤さんたちのようなマンパワーがないと難しい。

Q 日野市でどうしてそのような委託ができるようになったのか？

A 日野市は2000年東京多摩地域でごみ量・リサイクル率が共に最下位。市の打ち出した高いごみ袋の有料制に多くの市民が反発。その時、市を応援した市民が立ち上げたのが「まちの生ごみを考える会」。その信頼関係が基にある。

Q 川崎市では中学校給食が開始するが、その生ごみは？

A 環境局：小学校では113校中26校で飼料にリサイクルしている。中学校については教育委員会事務局で検討中。

○開催にあたり 環境局減量推進課長 加藤一宏

この交流会も5回目を迎え、生ごみリサイクル推進に大きな役割を果たしています。

川崎市では今年度「一般廃棄物処理基本計画（ごみ減量 未来へつなげるエコ暮らしプラン）」を策定し、平成37年度までの計画期間の中で、1人1日あたりのごみ排出量の10%削減や、ごみ焼却量の4万トン削減を目標にしています。生ごみについては、「使いきり・食べきり・水きり」の「3きり」の徹底を基本として、近年注目されている食品ロス対策にも取り組むこととしています。家庭での堆肥化などの取組推進のために、この交流会で紹介された事例が広まることを期待しています。

生ごみの減量においても3R（リデュース：発生・排出抑制、リユース：再使用、リサイクル：再生利用）の取組が必要ですので、今後ともごみの減量化・資源化にご理解とご協力をお願い申し上げます。

○交流会を終えて 実行委員長 門平きょう子

これまでの交流会は、学識経験者の方などのお話を基調講演とし、市民活動の紹介を数分ずつ行うという形式でしたが、今回は、市民活動の報告に時間をかけて話を聞きたいという意見がでました。市民団体の成功例としてひの・まちの生ごみを考える会を講演とし、エコガーデンはるひ野、ごうじ保育園、野菜だいすきファーム、と生ごみリサイクルを実践している団体の報告をメインとしましたが、会場がほぼ満員の約80人の参加者がありました。「実践している方々から生き生きとした身近な話が聞けて良かった」という声が多く聞かれ、発表者の方々の熱意が会場に伝わった手ごたえがありました。今回の交流会の成果として“次”につなげるためには何をしたらよいか、今後、実行委員会で議論を重ね、次回もより良い交流会にできたらと考えます。

当日のアンケートの結果 感想の一部を紹介します。

80%の高い回収率で、参考になる意見が多数ありました。

- ★ 日野市の取り組みは驚き。
- ★ せせらぎ農園は前から知っていたが、その後充実した活動が報告されますます共感した。
- ★ 会則会費もなく好きなとき活動OKは働く者に理想的。

- ★ リサイクルがテーマだったが、地域作りの参考になった。
- ★ 子どものうちの経験は大人になった時何らかの糧になる。
- ★ どの方も肩ひじ張らず楽しんでいる姿がとてもよくわかった。
- ★ 生ごみリサイクルで成功した人失敗した人の経験談を聞きたい。
- ★ 市民全体で取り組めるようになると良い。

●会場では、川崎市生ごみリサイクルリーダーによる生ごみリサイクル相談コーナーも設けられて、にぎわいました。

●休憩時間には、今年も「はぐるまの会」の協力によりハーブティーとクッキーが供され、大変おいしいと好評でした。

かわさき生ごみリサイクル交流会実行委員会 2016

委員長 門平きょう子（麻生・ごみゼロをめざす会）
副委員長 村山美香子（環境を考え行動する会）
阿部貴紅子（かわさき生ごみリサイクルの会）
飯田和子（新あさお生きごみ隊）
奥山玲子（近藤ルートの会）
加藤伸子（野菜だいすきファーム）
竹内ふみ子（エコグリーンクラブ）
戸高仁子（久地フレッシュグリーン倶楽部）
中村祥子（川崎市生ごみリサイクルリーダー）
福田真（社会福祉法人 はぐるまの会）
柳下博子（幸・循環型社会を考える会）

吉田賢治（川崎市生ごみリサイクルリーダー）
和田三恵子（川崎地域女性連絡協議会）
事務局（川崎市環境局生活環境部減量推進課）：
加藤一宏課長、中山博係長、東陽一担当係長
連絡先：川崎市環境局生活環境部減量推進課
電話 044-200-2605 ファクス 044-200-3923
〒210-8577 川崎市川崎区宮本町1

かわさき生ごみリサイクル交流会だより第5号
編集：門平きょう子、飯田和子、奥山玲子、加藤伸子